

●小径木は薪の山？

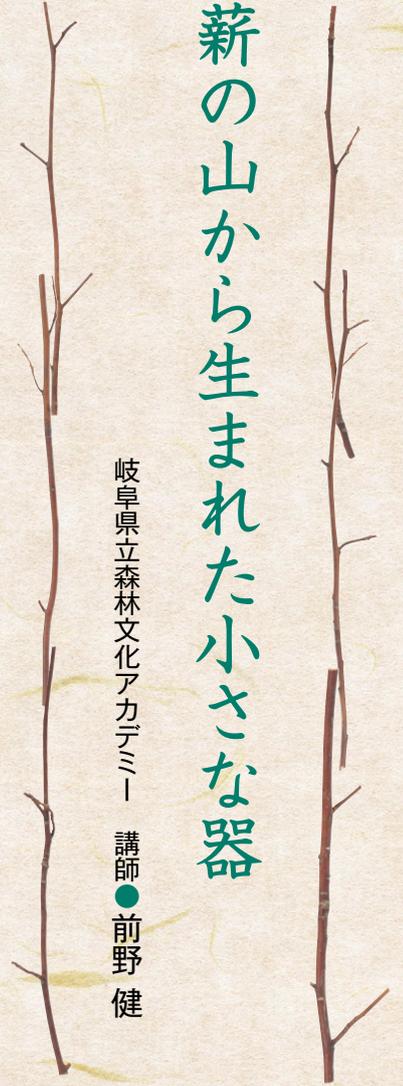
アカデミーのアトリエには、演習林の伐採実習や里山の整備で切られた直径十センチ〜十五センチ程度の樹種もまちな小径木が材料庫にストックされています。これらはグリーンウッドワークという木工技法でスプーンや椅子を作る材料になります。今までは薪がチップにしなければならなかった小径木・広葉樹も使い方が次第で用途はいろいろあるのです。



ヤマザクラ、ホオ、アオハダ、アワブキ、タカノツメなど、アカデミーの材料庫には、演習林や実習で整備した里山で伐採した小径広葉樹がたくさん保管されている。

薪の山から生まれた小さな器

岐阜県立森林文化アカデミー 講師 ●前野 健



しかし、なかなか全てが上手くいくように世の中でできていないもので、グリーンウッドとはいわゆる「生木」のこと。数か月たち木が乾いてドライウッドにならなくなると、再びこの小径木は薪にしなくてはよく燃えるので薪の適材と言えるでしょう。

しかし、なかなか全てが上手くいくように世の中でできていないもので、グリーンウッドとはいわゆる「生木」のこと。数か月たち木が乾いてドライウッドにならなくなると、再びこの小径木は薪にしなくてはよく燃えるので薪の適材と言えるでしょう。

●薪でも良いが…

木材の有効活用を考える上で、薪として燃やすのも悪くはありませんが、そこはプロのモノヅクラーとして、この半乾きの小径木を使い、何かしらの製品化を目指したいと考えました。そこで私が目を付けたのが木工旋盤というツールです。

●小径木と木工旋盤

木工旋盤とは、機械に固定した木材をモーターの力でぐるぐる回し、そこに刃物を当てて形を削り出す木工機械です。身近な物では、お椀や野球のバットなどがこの木工旋盤で作られています。今回、

●小径木の長所を生かして

本来、木材は乾燥が進むにつれて年輪の芯から割れが入るため、丸太から材料を切り出すときには芯を避ける必要があります。

アトリエの小径木を使って、直径が十センチ程度の材から、小皿や小鉢、コップなどを作ってみました。普段使いにちょうど良い素朴な器ができました。



アオハダのマグカップとアズキナンのお皿。いずれも木工旋盤で製作したもの。お皿の上に乗っているのはウワミズザクラで作ったお団子型の独楽。

しかし、(樹種やサイズにも左右されますが)小径木の場合は、この芯割れを起こさない材料があります。左の写真のヤマザクラのカップは直径八センチの芯持ち材を使って作りました。カップの側面をしてみると芯持ちの年輪が見えます。これは木工を多少知っている人が見ると「あれ？芯持ちなのになんで割れていないの？」と思う、珍しい小径木ならではのデザインなのです。



芯持ちのヤマザクラなので、器の前後に年輪が見える。このような意匠は大径の木では芯が割れるため作るのが難しい。

●雑木の木工は面白い！

身近な木を伐採して小径木でモノ作りしてみると、市場や材木店から手に入れた木を扱うのとは、まったく異なった感覚を感じると思います。一本一本の木の個性がわかったようで、まるで山に生えている木とすごく距離が近づいたように感じられるのです。